

## 乳児クラスの保育より(3)

### 一年の終わりと始まり

— 一歳児クラスへの進級 —

田辺 敦子

毎年のことですが、梅の花や沈丁花の香りが届く頃になると、いよいよ一年間の保育のまとめをする季節がやってきたのだと身体が感じるようになります。今回も、やはり例年と同じように、春の香りに誘われるようにして進級に向けた保育が展開されていきました。そして、その一環として行われた「引越し作業」は、子どもたちにとって、そしてその子どもたちと一年を共に過ごした私たち保育者にとっても、とても意味深い経験であったのではないかと今改めて実感しています。

周知のとおり保育園には春休みがありません。保育時間も長く、保育室は開園時間から閉園時間まで常に子どもたちの生活スペースになっています。その為、引越し準備や大掃除も保育が営まれている中で並行して行われることになります。勿論、保育を行うにあたっては子どもたちの生活や遊びが安全に保たれていることが最優先になるので、大掃除の作業そのものではできる範囲の中で無理なく行わなければなりません。この条件がプラスかマイナスかということは捉え方ひとつで変わってくるのだと思いますが、それはさておき私は今回の取組みを通して、たとえ乳児であっても、この引越しのプロセスを子どもたち自身の目で見ることがとても重要なことなのだと感じました。

さて、今回の大掃除は、保育室のガラス窓や受け入れコーナーに掛かっている白いレースのカーテンを洗濯することから始まりました。普段さり気なく掛かっているこのカーテンも、いったん外してみるとその意義は思いのほか大きく、やわらかい陽射しを保育室に導きながら、落ち着きある空間を演出してくれている大切な存在なのだと気づかされました。子どもたちも、カーテンのない空間にきよろきよろしながら、目に飛び込んでくるクリアな外界の様子に心を奪われているようでした。特にその時丁度きれいに咲いていた園庭の杏には、うっとりしたり指差しをしたりしてい

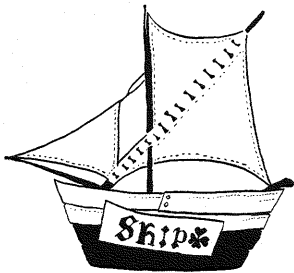
した。

ところで、乳児保育では個別の生活リズムに合わせて各々の日課が立てられている為、細やかな育児行為を行う中では、複数担任とは言え一度にまとまった時間を作って大掃除に当てることはできません。そこで、序盤のカーテン洗いに続くガラス磨きやベッドの汚れ落とし、棚拭きや愛着ある遊具の洗濯などの細かい作業は、タイムミングを見計らって少しずつすすめていくことになったのですが、この『細切れ大掃除』には驚きの利点がありました。生活の一部として大掃除の様子を垣間見ることにより、日頃見せていたお掃除遊びよりも一層、本格的な再現遊びが展開されるようになったのです。大人の動きを観察する際の視点による違いなのか、再現の仕方には様々なタイプがありました。例えばKちゃんの雑巾がけでは、自分に届く範囲の棚を拭いていた今までのスタイルに加え、背伸びをして高い部分の壁を拭こうとする技を身につけました。またMちゃんは、洗面器を近くに用意しておき、こまめに雑巾(布)を濯ぐという清潔振りを披露してくれるようになりました。「大掃除のお手伝いをしてくれてありがとう」と声をかけると、『うん、うん』と首を縦に振って褒められた喜びを表していました。また「一年間お世話になったお部屋にありがとうを言いながらきれいにしようね」「みんなは大きくなったから、お隣のお部屋で遊べるようになるのよ。楽しみにしようね」「みんながお兄ちゃんたちのお部屋にお引越し

したら、ここには赤ちゃんが来るのよ。みんなもね、前はちいさな赤ちゃんだったのよ。覚えている？」。熱心に大掃除の模倣遊びをすすめる子どもたちの手が休んだ時などに子どもたちの一年間の成長を喜ぶ言葉をかけると、不思議そうにこちらを見ながらうなづいていました。

思い返せば、入園当初まだ腹這いや仰向け寝の姿勢で遊んでいた子どもたちが、一年後にはちよこちよこと足音を立てて小走りしながら移動するようにまで成長しました。そして、一年の締めくくりとしての大掃除をも見事に模倣するまでになったのです。私自身もいつしか、日々の保育の積み重ねがあつてこそ得られる幸せな思いに包まれていました。

大掃除の模倣遊びを通して、自分たちが大きくなったこと、まもなく生活の場が変わろうとしていることを感じ取った子どもたちは、その後も引き続き安定した中で生活することができました。日々の遊びの中でも、『大きくなったかな？』（身体測定ごっこ）をしたり、ごちそうを作ってお祝いをしたり、またこの一年間の四季折々にうたったわらべうた遊びや唱えた詩を再度楽しんだり、大人も加わりながら〇歳児クラス最後の遊びを満喫しました。



さて、いよいよ引越し本番となった際の子どもたちはどうであったかというところ、ほとんど戸惑う様子を見せずに隣の保育室へと移動することができました。幸い進級先の一歳児クラスも、私を含めた持ち上がり保育者が担当になったため、進級後も不安そうな様子はなく、むしろ一歳児ならではのやんちゃ振りを発揮する日々となりました。

子どもたちにとって、生活環境の変化はとて大きなできごとです。私たち保育者は、子どもたちがこれから体験する新しい出会いが少しでも楽しいものとなるように、また希望を抱いて前に進んでいけるように、導入と終結を上手に用意していけるような保育のセンスを磨いていかなければなりません。その練習として、まずは自身新しいことに会おう際にも、構えることなく、楽しみをいっぱいに見出して向かっていけるようなテクニクを身につけていくというのもよいかもしれません。私も、保育のセンスを磨く為に、日々の生活の中でもアイデア豊かに過ごしていきたいものです。

(かしのき保育園)